

「読書感想文コンクール」を
実施しました

葛飾区では、教育振興ビジョンの取組の一つとして、児童・生徒の読書活動を推進するために「読書感想文コンクール」を実施しています。

今年度は、小学生1万6千102点、中学生5千91点の応募があり、その中から、次の最優秀賞・優秀賞・佳作が選ばれたほか、321人が入選しました。

小学校低学年の部

最優秀賞

山田 有真（やまだ ゆうま・青戸小2年）

優秀賞

川合 美穂（かわい みほ・南奥戸小1年）

高瀬 華（たかせ はな・堀切小1年）

佳作

池田 陽輝（いけだ はるき・よつぎ小2年）

遅澤 朱音（おそざわ あかね・水元小1年）

小学校中学年の部

最優秀賞

影山 桃子（かげやま ももこ・川端小3年）

優秀賞

大久保 直紀（おおくぼ なおき・道上小4年）

笠原 正一朗（かさはら せいいちろう・上千葉小4年）

佳作

井出 海翔（いずい かいと・堀切小3年）

井上 和音（いのうえ かずね・青戸小4年）

小学校高学年の部

最優秀賞

外澤 真彩（とざわ まあや・よつぎ小6年）

優秀賞

鈴木 朋弥（すずき ともみ・北野小5年）

森 海峻（もり かいしゅん・二上小5年）

佳作

澤田 爽（さわだ さや・原田小5年）

盛川 智隆（もりかわ とまたか・堀切小6年）

中学生の部

最優秀賞

山口 弥生（やまぐち やよい・水元中3年）

優秀賞

小池 チェルシー（いけ ちえるしー・堀切中3年）

竹鼻 美玖（たけはな みく・本田中3年）

立川 莉瑚（たちかわ りこ・高砂中1年）

佳作

石田 穰司（いしだ じょうじ・双葉中2年）

岡田 明子（おかだ あきこ・立石中3年）

豊島 奈々（とよしま なな・本田中2年）

深津 千穂（ふかつ ちほ・立石中2年）

吉田 彩香（よしだ あやか・双葉中1年）

渡辺 夏希（わたなべ なつき・中川中1年）

（敬称略・同一賞内は氏名の五十音順）

指導室 ☎(5)654(8)469



中学生の部・最優秀賞

「絆・愛情が持つ力」

水元中学校3年 山口 弥生

「卵の緒」は、目に見えているものより、目に見えていないもののほうが、どれだけ価値のあるものか教えてくれました。

この物語の主人公は、「捨て子」です。「捨て子」と聞くと、決して良い印象はありません。しかし、主人公の育生は、事実を受け入れ、母と二人で暮らしています。私は、この物語を読むまで、「捨て子の少年」と言われたら、心のどこかに傷を負っているような雰囲気の子供を思い浮かべていました。でも、育生は違います。とても素直で、血の繋がっていない母にも優しく何より仲が良いです。それは何故かという育生の母、君子は育生のことを誰よりも愛しているからです。物語中にこんな君子の台詞があります。

「母さんは、誰よりも育生が好き。それはすごい勢いで、あなたを愛してるの。今までもこれからもずっと変わらずだよ。ねえ。他に何がいる？それで十分でしょ？」

という台詞です。これは、育生が「へその緒見せて」と君子に頼んだが、君子が見せたのは卵の殻だった、という場面です。こんなにストリートに愛情を伝えるということは、例えば実の母親であっても簡単にできないと思います。また、その台詞に対して、何も言わずに頷く育生も印象的でした。「へその緒」が「卵の殻」であったも、親子の絆は変わらないのです。君子の言う通り、強く愛する気持さえあれば、血が繋がってなくても十分なのです。

「家族」の形は色々あって良いと思います。育生と君子のような、血の繋がっていない母子家庭や祖父母と孫だけの家庭・・・色々ありますが、どんな形の家族であっても必要なのは、強く確かな「絆」と「愛情」だと思います。もちろん、私のような、母がいて、父がいて、子がいて・・・という世間から見ると、いわゆる普通の家庭であっても必要です。

本当に幸せな家庭というのは、「自分達には確かな絆がある」と自信を持って断言できるような家庭だと思います。目に見えない、愛とか絆とかを確かなものにするには、簡単なように思えるけど、難しいことだと思います。さら

にそれは、身近にある、家族、友達など近い存在であるほど難しいのではないかと、私は感じることもあります。毎日顔を合わせている両親や、仲良くしている友達と、絆や愛情を確かめ合うなんて、なかなか難しいことだし、絆や愛情の存在自体を日常生活の中では、つい忘れがちです。でも、難しいからこそ価値があることなのだと思うので、君子のようにとまどいはないけれど、私も日常の中で自分の気持ちや素直に伝えていきたいです。そして、目に見えない確かな証しを、これから経験するいくつもの人との関わりの中で創っていければいいと思います。

また「卵の緒」は、育生の何気ない日常を書いたものです。しかし、その中にも、たくさんの人と人との関わりがあります。出会いや別れ、繋がりが……。そこにも形は色々あって、不思議だと感じました。そして何よりも、あたたかみを感じました。この物語を読んでから人と関わり、今までは違った視点で相手を見るようになってくるようになりました。そして、自分を取り巻いている周囲の人々への感謝の気持ちを再認識することができると思います。

私は前にも書いたように、特別な事は何も無い普通の家庭で生活しています。それはそれでもとても良い事だと思われ、私自身、今の生活に十分満足しています。でも、人間である以上、正直私も欲が出てしまうことがあります。以前までの、私にとつての「理想の家庭」は、頼りがいのある父と、優しい母がいて、お金がたくさんあって・・・という、まるでテレビドラマにでも出て来そうな家庭でした。しかし、この物語を読み終わって、もう一度自分と家族との繋がりを見つめ直したとき、そんな理想像は浮かばなくなりました。その代わりに、ただみんな笑顔でいてくれたら、それだけで十分幸せだと思えました。そして、自分は家族にたくさんの愛情を受けていることに改めて気づきました。「家族」という言葉は、人との繋がりの名前前に過ぎません。大切なのは、どう繋がっているかです。「本当の幸せ」は、目には見えないところにあります。そしてそれは、強く、優しく、素直です。そんな事を、この物語から感じました。慌ただしい日常生活の中で、忘れてしまいがちな、人と人との繋がりのあたたかさ、そして、絆や愛情が持つ力を自分自身に問い、答えることで再認識させてくれる、そんな物語でした。